

乳がんが切除した乳房を、以前と同じような姿で取り戻すことができるのなら……!? 乳房再建の最新技術に迫る。

人体はここまで
創造された!

医療最前線

ヒトの心を持つロボット、鉄腕アトム。現代の科学をもってしても、未だアトムは作れない。しかし、人間がその知恵を駆使して作った創造物がヒトの肉体の一部となっていく、そんな医療現場を何度となく撮影するうちに、もしかすると僕らがアトムに近づいたのかもしれない。そんな風に考えるようになった。

05年には15万6000人にものぼっている(厚生労働省「患者調査」より)。乳がんの基本的な治療は手術だ。がんが小さければ部分的な切除ですむが、進行していたら乳房をほとんど切除しなければならぬ。毎年、何万人という女性が乳房を失うことになる。

乳房を失うということは、女性性を

だ。矢永クリニック(北九州市小倉北区)院長、矢永博子医師は、乳房を失った女性に対し、より繊細で本物に近い「乳房再建」をおこなっている。単に乳房をふくらませるだけでなく、自分のものと見まがうほどの乳輪や乳頭まで作ってみせる。再建法にはいくつ種類があるが、目下、主流になっているのが、「インプラン

ト法」と呼ばれる再建術だ。07年にアメ

▼手術にかかる費用は50万~80万円ほど(保険適用外)

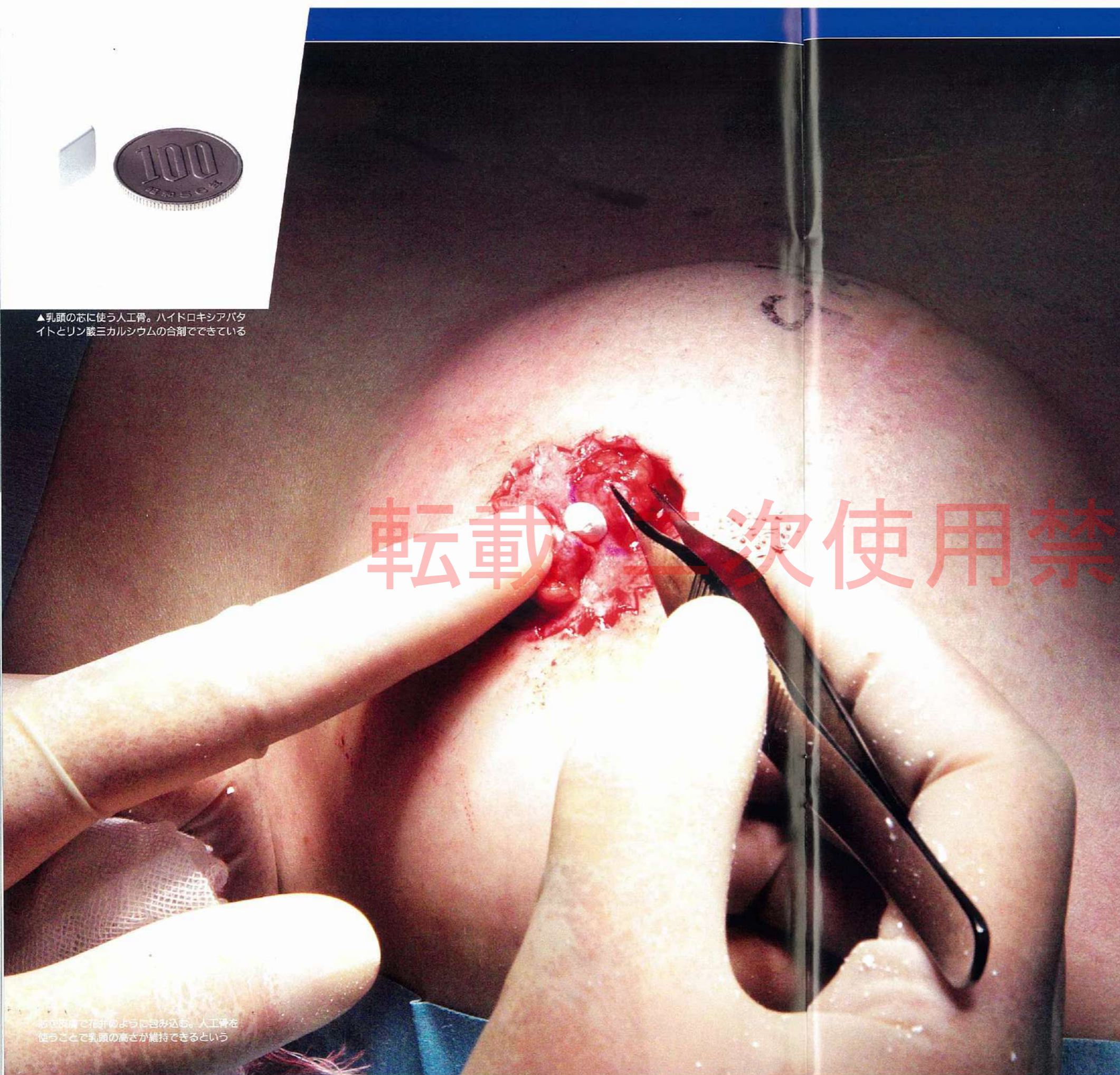
人工乳房「女性を救う」

手術現場

取材・撮影
伊藤隼也
(富良野・医療ジャーナリスト)



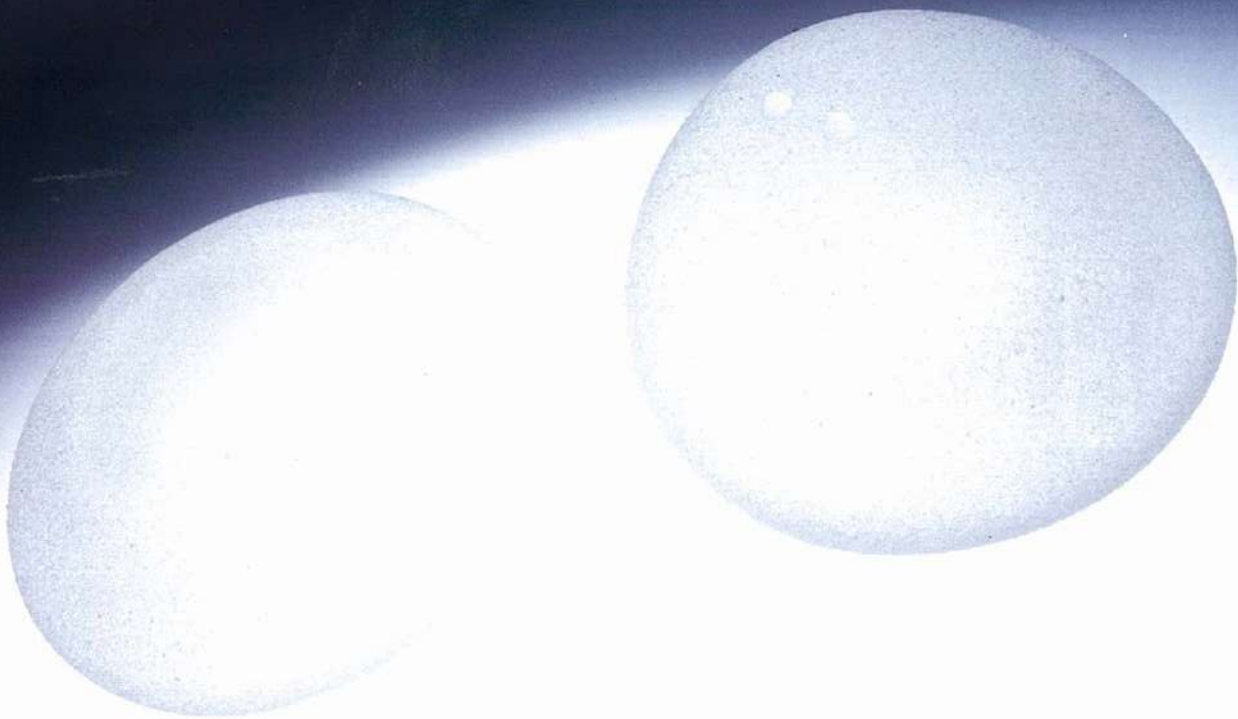
転載二次使用禁止



▲乳頭の芯に使う人工骨。ハイドロキシアパタイトとリン酸三カルシウムの合剤できている

ぬいぐるみで設計のように包み込む。人工骨を使うことで乳頭の高さが維持できるという

乳房の代わりになるシリコン。弾力性があり、本物の乳房のように柔らかい



転載 二次植用禁

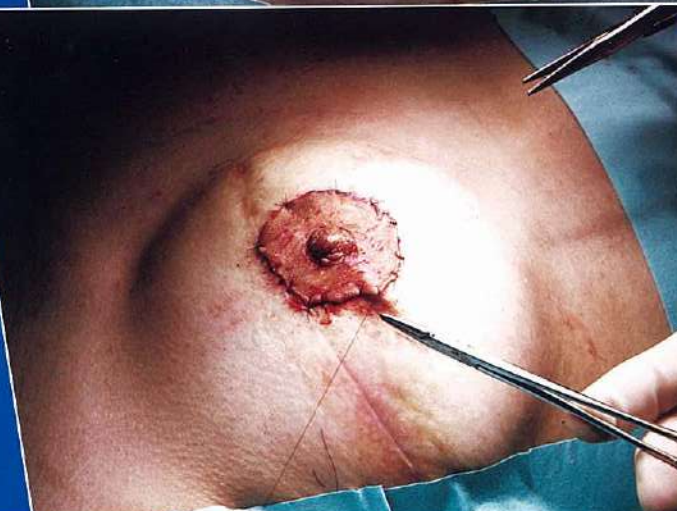
◀鼠径部の皮膚を乳輪として用いる。ちょっと茶色っぽい色の具合がちょうどいい



による)。インプラント法は胸の筋肉(大胸筋)の下にエクスパンダー(組織拡張器)を入れ、外から少しずつ生理食塩水を注入して、時間をかけて皮膚を伸ばしていく。伸びたところで、エクスパンダーを外し、代わりに人工乳房(写真・上)を入れる。矢永医師の「匠の技」が発揮されるのは、ここからだ。

ふくらんだ乳房の中央の皮膚を、ラインに沿ってギザギザの円形に切る。さらに移植した皮膚で乳頭の芯になる人工骨(写真・前ページ小)を巻く。次に乳輪にあたる部分に鼠径部(足の付け根)の、色素沈着して黒ずんだ皮膚を移植するが、皮膚の中心には切り込みが入っていて、乳頭をそこから出す。

乳輪や乳頭再建にかかる時間は約1時間。その間、矢永医師は乳房に集中する。反対側の乳頭の大きさや形と似せるため、



彫刻刀を用いて人工骨を削っていく。何度となく大きさ、形を確かめ、微調整を繰り返す。女性の命を吹き込む作業だけに、失敗は許されない——そんな気迫がファインダーの中にみなぎっていた。

そつしてできあがった乳輪、乳頭。術後は縫った後が残りが残り、少し腫れているが、1年後には形が整い、ふつこの乳房と見分けがつかないくらいになる。

実際に乳房再建を試みた女性は、若い人から年配の人まで幅広い。インタビュ—に答えた女性の最高齢は70歳半ば。彼女は喪失から長い時を経て一大決心をして再建手術を受け、「今から第一の人生が始まる」と嬉しそうに話していた。ほかにも「女性として胸を張って生きていくことができる」、「温泉や旅行に堂々と行く」、「これで孫とお風呂に入れる」と話す人たちがいた。彼女たちの生き生きとした表情が、今も記憶に残る。

◀移植した皮膚を伸ばしながら乳輪を作っていく。縫い目をギザギザにするのは自然に見せるため